

氏 名	千 原 大 五 郎 ち はら だい ご ろう
学 位 の 種 類	工 学 博 士
学 位 記 番 号	論 工 博 第 206 号
学位授与の日付	昭 和 43 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	仏 跡 ボ ロ ブ ドール の 建 築 的 研 究

論文調査委員 (主 査)
教 授 福 山 敏 男 教 授 川 上 貢 教 授 増 田 友 也

論 文 内 容 の 要 旨

本論文はインドネシア国ジャワ島に現存する仏跡ボロブドールに関して、建築的研究を行なった結果を述べたもので、序および7章からなっている。

序においては本研究を行なうに至った動機およびその意図するところを述べている。

第1章においてはまずボロブドールを中心とするヒンズー・ジャワ芸術の成立とその衰退、および19世紀の再発見に至るいきさつを述べ、ボロブドールの所在地の環境、その名称の起源等について論じ、次いでその建築的構成の大要を解説し、さらにこの建造物を生むに至った背景となるジャワ島の歴史について記述している。

第2章においてはジャワ島におけるボロブドールを中心とするヒンズー・ジャワ芸術の遺構が、回教の隆盛によって全く忘れられ、荒廃に帰していたのを、オランダやイギリスのジャワ領有によって再発見され、漸次組織的、学術的に調査研究されて、次第にその全貌を現わすに至った経過と、それに従事した多くの研究者の業績について論述し、さらに復原工事の行なわれた状況およびその内容等に論及している。

第3章においてはボロブドール築造年代が何時であったかを追求している。まずジャワの歴史の上から大略の建設年代を推論し、次にボロブドールの築造に関して伝わっている伝説を挙げ、その矛盾を指摘し、碑銘、古代文字等考古学的見地からの建設年代の追及について論述し、さらにボロブドールそのものの各部に発見された文字や記号等の刻銘年代を推定した諸説を紹介して、結論的な建設年代を指摘している。最後にボロブドールの彫刻の様式手法をインドにおける同種のものと比較して、その造立年代を推論している。

第4章は本論文の中核をなすもので、ボロブドール全体の建築的構成を、その基部から最頂部に至る順序をもって詳説している。即ち現在は地下に埋没している建設当初の基礎の建築的構成を詳細に検討し、次いでこの基壇が地下に埋められ、別に周囲に現基壇が作られるような設計変更が行なわれた理由を推論し、またこの設計変更によってプロポーシヨンの造形的に見劣りするようになったこと、およびこの建造

物が宗教的に表徴しようとしたものの一部が失われたことを指摘している。次に現基壇の規模、構成を説き、地下のオリジナルな基壇との巧妙な接続工作进行を説明し、さらに基壇主壁に施された、装飾的浮彫について論述している。

基壇に続いて仏龕について述べている。即ち仏龕が独特の建築構成をもって巧みに配置され、この建造物に極めてユニークな造形美をもたらす大きな要素となっている点を指摘し、具体的に、仏龕の数と平面的立体的な配置を解説し、次いで仏龕が最下層の104個のそれと、上層の328個のそれとの2種の異なった意匠をもっていること、ならびに仏龕相互が中間パネルによって連鎖状につながれている状況を詳述している。次いで回廊の構成を解説している。即ち第1乃至第4回廊の立体的関連、それぞれの幅員等を示し、浮彫面を中心とする主壁面のプロファイルを詳説し、また浮彫画面の縦横の仕切りの装飾彫刻について説明している。欄楯内壁の構成については、第1回廊のそれと、第2～第4回廊のそれとの間に大きな差異のあることを指摘し、まず後者の構成を述べ、次いで第1回廊欄楯の建築構成においては、現在見られるものが作られる前に、重大な設計変更が行なわれたことを推論し、その証拠と考えられる点を指摘している。次にこの建造物の排水計画を示し、排水口の配置と傑出した意匠とを解説している。

次いでこの建造物の東西南北4面の地上から最頂部に昇るために設けられている階段と、それ昇りつつ潜り抜ける拱門との配置と構成とを詳述し、各回廊毎に異なったモチーフの装飾彫刻を施された拱門の設計が、この建造物の各部の中でも、特に優れたものであることを強調している。

次はこの建造物の第7、8、9層の円壇である。即ちこれら3層の円壇上に、72個の鐘形のスツウーパが配されていて、またその意匠は2種あることを述べ、円壇周辺の建築的構成のかもしれない空間表現と、それより下層の方形壇層のそれとの巧妙な対比を指摘している。

最後に最頂部にある大きなスツウーパについて、その直径及び高さの数値を示した後、基部と胴部のプロファイルを詳説し、頂部に往時存在したはずの相輪の意匠とその復原について論及し、さらにこのスツウーパの構造と内部の埋蔵物についての考察を行なっている。

第5章においてはボロブドールの仏像について論じている。先に述べた432個の仏龕と円壇上の72個のスツウーパの中には、それぞれ結跏趺座する仏像各1体が安置されており、これら合計504体の仏像は、深遠微妙な宗教的意義と、豊麗円熟の美術的価値とを秘めていて、この一大宗教建築において極めて重要な位置を占めるものであることを指摘している。さらに下部4層の仏龕中の仏像は、それぞれ印相を異にする所謂四方仏として、東西南北に面する4種の仏像に分類し得ること、第5層の仏像は方位に無関係に同一の印相を結ぶ中央仏であること、および上層3段の円壇上の鐘形スツウーパ内の仏像は、転法輪の釈迦仏であることを述べ、これらの仏像が何れもインドにおけるグプタ期の最も円熟した手法の彫像として、美術的にも極めて貴重なものであることを指摘している。

第6章においてはボロブドールの浮彫について論じている。まず浮彫の作風はインドのグプタ期の系統に属する極めて優れたものであること、またそれらは、豊富なモチーフを駆使してこの建造物の各部を飾っている装飾的な浮彫と、回廊の両側の壁面に連続して彫られた仏教経典を典拠とする説話的浮彫の2種に大別し得ることを述べ、さらに後者については第1回廊主壁上段を占める120面をはじめとして、全体で11シリーズに分け得ること、およびそれらのシリーズと仏典との関連が、今日まで多くの研究者によっ

て解明されてきた経緯を述べている。

第7章においては本論文の結語をなす論説として、前章までの論述が、ボロブドールを単一の建造物として取上げているのに対して、この建造物をその近傍に現存する、または存在したと考えられる、他の建造物と総合して考究するとき、宗教的に乃至は建築的に、如何なる性格のものとして理解するのが最も妥当であるかについて論述している。即ち近傍に現存する、チャンディ・メンドウットおよびチャンディ・パオンとの関係位置、それら三者を結んでいたと考えられる長大な参道の存在に対する考証、近傍に必ずあったはずの僧坊や墓地等の考証に触れた後、ボロブドールは、寺院構成をなす建築群の中の一堂宇としては、スツウーパ(塔)の性格をもつものではあるが、その建築構成を詳細に検討してみるならば、一部学者のいう単なるスツウーパでもなく、また単なる曼荼羅でもなく、両者の性格が混然一体に融合したものであり、全く独自の発想による建築芸術の創作と断ずるのが、最も当を得た解釈であると結論している。

論文審査の結果の要旨

所謂ヒンズー・ジャワ芸術の遺品に関する我が国における研究資料文献等は意外に乏しく、その代表的遺構たる仏跡ボロブドールの宗教美術的研究に一、二の優れたものを見るのみで、殊に建築学の立場から、本格的にこれを取り上げたものはない。本研究は著者が過去における考古学者、宗教美術研究者等の断片的な研究資料を総合し分析しつつ考察を重ね、独自の見解をまとめ、はじめて仏跡ボロブドールの全貌を建築的に解明しようとしたもので、なお多くの課題を残すヒンズー・ジャワ芸術の体系的研究の一角を占めることを目的としている。

まず本研究では、ヒンズー・ジャワ芸術遺品中におけるボロブドールの占める比重を重視し、これを取り上げ、それが隆盛を極めた宗教的環境の中に造営されながら、突如として史上から姿を没し、近世に至って再び発見されたという数奇な運命の歴史的背景を考察した後、その再発見から今日の姿に復原されるまでの90年間に、多くの学者による調査研究が行なわれ、それらが次第に組織的学術的に進展しつつ貴重な文献資料等を今日に遺した経緯を克明に追及論述している。この部分は今後の研究者に有用な指針となるものと考えられる。

次いでこの遺構の建設年代を追及して、最終的には、今後明確にその年時を指示する碑銘文献等の発見を見ない限り、現在までの各種の研究手法による推論からでは、850年前後のものとする以上には適確な論証をなし得ないとする見解をとっている。

次にはこの建造物を实地に踏査測量して、その建築的構成を細部にわたって解明記述しているが、これらの記述は注意深い実物観察の成果であり、建築家の記述として、技術的に建築論的に極めて的確な論説であるといえる。特にオリジナルな設計計画と、施工途上における設計変更の様相を指摘して、その点から現存するものを批判している記述は極めて妥当なものと思われる。

次に著者は、この建造物を特色づける点で欠くことのできない存在である五百余体の仏像彫刻と千数百面に及ぶ浮彫に関しては、宗教美術的観点よりする研究が内外の諸学者により既に数多く発表せられている事実を指摘している。そしてこれらの造像を含めてボロブドール全体を、多くの研究家がそれぞれの史学的、考古学的、宗教学的な観点に拘泥し、あるいはスツウーパなりと断じ、あるいは曼荼羅なりと断じ

ようとしている姿勢に対し、著者は建築家として、自由で客観的な観点に立つことにより、ポロブドールの造形を非凡な芸術家の独自の構想による雄大な創作として理解し得るものであると結論している。

これを要するに、本論文は従来研究業績が少なく、なお未開の分野を多く残しているヒンズー・ジャワ期の建築芸術を代表するものを意欲的にとりあげ、直接その遺構に接して、建築家としての独自の立場から多方面の考察を加え、注意すべき成果を収めたものであり、学術上寄与するところが少なくない。

よってこの論文は工学博士の学位論文として価値あるものと認める。